

## ■舞踊学の動向

### モダンダンスとバレエ研究の現状

—80年代DRJを中心に—

片岡康子

はじめに

80年代の幕開け、モダンダンスに関連して大きな話題を呼んだのは、ニューヨーク州立大学パーチェス校において開催された“The Early Years Modern Dance from 1900 to 1930's”（1981年4月9～12日）であった。アメリカのモダンダンス研究に重要なこの時代の様相が、色々な視点から提示されたこの企画に象徴されるように、80年代に入るや否や、すでに20世紀のエピローグは始まっていたといえよう。90年代に入った今は、モダンダンス・パイオニアの生誕百年という通過点も過ぎ、巨匠グラハム（1991）、ハンヤ・ホルム（1992）も逝って、モダンダンスの舞踊家の直筆資料、写真、フィルム等の資料整理に基づく自伝、伝記、写真集の出版やビデオ制作が相次ぎ、特にビデオに関しては、ここ数年間に、ショーン、ヴィグマン、グラハム、ハンフリー、リモン、ホートンなどの貴重なビデオが制作・販売されている。また生存中ではあるが一仕事終えた20世紀の舞踊家達の自伝や伝記出版も目白押しで、このような現象はバレエにおいても同様といえよう。

さて「舞踊学」創刊（1978）以来これまで、舞踊学の動向はいろいろな視点から取り上げられてきた（註①～⑥）が、今回は、モダンダンスとバレエ研究の現状を、アメリカの代表的な舞踊学会「Congress on Research in Dance (CORD)」の「Dance Research Journal (DRJ)」の80年代を中心（1978-1992）に見ていきたい。CORD関連では上林氏が、1967～1979年までのDance Research Annual (DRA) の重要文献を紹介・解説され（註④）ている。

#### 1. DRJ論文にみる研究動向

##### (1) 領域別・種類別分類結果

DRJ 1980～1992から抽出された論文は77件、全抽出論文を領域別カテゴリーに分類した結果は下表のようになった。

〈領域別分類結果〉

- 000 舞踊美学（11件，14.2%）
- 100 舞踊芸術学（19件，24.7%）
  - 110 作品研究（10件，13.0%）
  - 120 舞踊家研究（8件，10.4%）

- 130 舞台美術（1件，1.3%）
- 200 舞踊史（8件，10.4%）
- 300 舞踊人類学（14件，18.2%）
- 400 舞踊社会学（4件，5.2%）
- 500 舞踊教育学（5件，6.5%）
- 600 舞踊記録法，資料検索（3件，3.9%）
- 700 心理学（6件，7.8%）
- 800 バイオメカニクス（7件，9.1%）  
（解剖，生理，栄養を含む）

以上より、主たる領域は100 舞踊芸術学（24.7%）、300 舞踊人類学（18.2%）であった。次いで、000 舞踊美学（14.2%）、200 舞踊史（10.4%）、800 バイオメカニクス（9.1%）、700 心理学（7.8%）の領域であった。また舞踊芸術学の論文内容の殆どは舞踊史とクロス討議しており、これらを一括すると歴史的視点をもった研究（27件，35.1%）が最も多くなる。500 舞踊教育学領域は少なかったが、参考までに80年代のJOHPERDの結果（註⑦）をみると、舞踊教育学領域（61.4%）が大部分を占め、ついでバイオメカニクス（8.7%）、セラピー（6.5%）となっており、学術誌ではないがDance Magazineをみると、70年代からバレエ教授法（Ballet Pedagogy）の領域が充実してきている。

DRA第2巻（1970）で特集され、70年代DRJにはみられたダンスセラピー領域は、80年代以降は皆無であった。アメリカ・セラピー学会の充実に伴って「American Dance Therapy Journal」（1966年創刊）にセラピー関係論文は移行しているであろう。なお、日本でも本年（1992）、ダンスセラピー学会が創立され、ダンスセラピー研究の進展が大いに期待されるところである。

以上の領域別内容を研究対象の種類別でみると、400 舞踊人類学（14件）を除いて63件中、a. バレエ（25件）とb. モダンダンス（10件）が大半を占め、舞踊美学及び心理学やバイオメカニクスのような基礎研究領域では、バレエ、モダンダンスと対象を明記した論文もあるが、対象をダンスとだけしている論文が多く、c. ダンス一般が28件となっている。

#### (2) 領域別概観

ここでは、モダンダンスとバレエを対象にした主要論文を中心に領域別概観を行なう。

##### 000 舞踊美学

まずF. スパーショットの論文があげられる。Francis Sparshott, 1982/15/1, On The Question: Why Do Philosophers Neglect The Aesthetics of The Dance?, pp.5-30. この論文では、一般的芸術理論はダンスに即適用出来ないとして、それらの点とその理由を、ソクラテスから現代のM.

シート, S. J.コーエンに至るまでの美学論と数人の舞踊家や作品とを突き合わせながら舞踊美学の核概念を論議している。この論文の表題は、「なぜ哲学者は舞踊美学を無視するのか」となっており、哲学者につきつけた質問状でもある。

次にJ. B.アルターの論文があげられる。Judith B. Alter, 1992/24/1, Havelock Ellis's Essay "The Art of Dancing": Reconsideration, pp.27-35. この論文は, J. マーティン, M. ドゥブラー, W. ソレル, W. テリー, F. L. ロジャース, F. スパージュット等数多くの舞踊著作に引用されているハヴェロック・エリスのエッセイ「The Art of Dancing」(H. エリス著, The Dance of life, 1923, pp.34-63.所収)を, 各著作に引用されている箇所を論議しながら, あらためてエリスの論全体を再考している。

またユニークなテーマとしては, 熱力学の第2法則エントロピーとダンスを関連づけながら, ダンスコミュニケーション, 振付過程, 芸術創造の意義などを探った論文, Judith A. Gray, 1981-82/14/1&2, The Law of Entropy and Dance, pp.47-50., その他「マゾヒストとしてのダンサー」や「ダンスとフェミニスト」を論じた論文, Jock Abra, 1987-88/19/2, The Dancer as Masochist, pp.33-39., Ann Daly, 1991/23/1, Unlimited Partnership: Dance and Feminist Analysis, pp.2-5.などがあげられる。

## 100 舞踊芸術学

110 作品研究では, 第1に, Richard Bizot, 1984/16/1, Lester Horton's Salome, pp.35-40., L. ホートン (1906~1953) の「サロメ」の研究である。オスカー・ワイルドの原作にもとづいた「サロメ」は, ホートンが初演 (1934) 以来亡くなる1953年まで, 約20年間追いつけた生涯のテーマであり, その間5回改訂して発表した6作品はコンセプト, 振付・演出のスタイル, 音楽, 衣装, 装置が全く異なっている。これらの内容を中心に, 意欲的な資料収集と生存する関係者の証言等を用いて芸術家の内的軌跡とその作品の外的変容を探った興味深い論文である。

次にMarcia B. Siegel, 1989/21/1, The Green Table-sources of a classic, pp.15-21. この論文は, K. ヨースの作品「グリーンテーブル」の原点を中世の死の舞踊の壁画, とくにそこに描かれていた死神にあるとして中世との関わりを明らかにし, さらに舞踊作品の空間性を絵画の構図と比較検討して多大な示唆を与える論文である。すでにシーゲルには, グリーンテーブルの登場人物にみられる動きの質を明示し, それらの動きに対する独自の解釈を展開した論文, The Green Table: Movement Masterpiece, Art in Society, 1968,

pp.447-452.がある。

さらに作品研究の方法論をテーマにした論文, Sheila Marion, 1992/24/1, Studying Water Study, pp.1-12.があげられる。この論文では, アメリカの大学において, ノーテーション授業のテキストに用いられ, 今日でもしばしば上演されるD. ハンプリーの「ウォーター・スタディー」に関する4つの先行研究論文, すなわち①M. シーゲル, ②D. ジョウイットの解釈学的分析と③A. ロディガー, ④M. デイビスとC. シュマイスの記号的分析を用いた研究結果を比較検討しながら舞踊作品研究の方法論の論議を試みている。

その他, ストラビンスキーの音楽による「結婚」のアメリカ初演は1929年4月25日ニューヨークのメトロポリタンオペラハウスであったが, そこで上演されたのはプロニスラヴァ・ニジスカ (1891-1972) の作品 (1923) ではなく, 同世代のロシアの女性, 元ポリショイのプリマ・バレリーナ, エリザベータ・アンダーソン・イヴァンゾヴァ (1890-1973) の振付た作品であったという事実を繙いた論文, Lawrence Sullivan, 1981-82/14/1&2, Les Noces: the American Premiere, pp.3-13. さらに, 美術家レーリッヒに関する視覚的資料から「春の祭典」におけるニジンスキーの振付方法にアプローチし, 1987年の再現上演を実質的にリードした論文, Millicent Hodson, 1986-87/18/2, Nijinsky's Choreographic Method: Visual Sources from Roerich for Le Sacre du printemps, pp.7-15.などがあげられる。

また最新号 (1992/Fall/24/2) にはチューダーの「ダーク・エレジー」(1937初演) 研究 ('89CORD会議のパネルに基づいた特集) が掲載されている。第1の論文では, フロアパターンやラバノーテーションを用いた動きの分析から振付の特性が, 第2の論文では, ABTとスウエーデン・バレエ団の演技比較及び映像による伝達の問題が, 第3の論文では, この作品に登場する女と男の性役割を台本, 動き, 衣装, 空間関係から分析して作品の世界が論じられている。①John Giffin, A Dance Director's Investigation into Selected Constitutive Properties of Antony Tudor's Dark Elegies, pp.19-24. ②Vela Maletic, The Identity of Tudor's Dark Elegies as Mediated by Two Dance Companies and Two Technologies, pp.25-27. ③Ann Dils, Dark Elegies and Gender, pp.28-30.

120 舞踊家研究については, モダンダンスでは, D. ジョウイットの「ダンカンのイメージ」, Deborah Jowitt, 1985-86/17/2&18/1, Images of Isadora: The Search for Motion, pp.21-29., D. S.ホーの「ヴィグマンの理論と振付」に関する研究, Dianne S. Howe, 1987/19/1, The Notion

of Mysticism in the Philosophy and Choreography of Mary Wigman 1914-1931, pp.19-24., バレエでは, K. ネルソンの「フォーキン」, Karen Nelson, 1984/16/2, Bringing Fokine to Light, pp.3-12., C. メイヤーの「ルビンシュタイン」などがある。Charles S. Mayer, 1989/20/2, Ida Rubinstein: A Twentieth-Century Cleopatra, pp.33-51.

さらに最新号(1992/Fall)には, ナチのワルシャワ侵攻(1939)直前の1年間(1937-1938), ポーランドバレエ団でニジンスカが行なった活動の詳細を, 当時のダンサーへのインタビュー, 新しく手に入れた当時のプログラム, 写真, 新聞批評などから明らかにした論文, Lisa C. Arkin, 1992/24/2, Bronislava Nijinska and the Polish Ballet, 1937-1938: Missing Chapter of Legacy, pp.1-16.が掲載されている。高揚するナショナリズムと自己のモダニズム美学の狭間で葛藤しつつ5作品を発表した舞踊家ニジンスカの実像を描きだそうとしている。

その他, 一般的にあまり知られていない20年代ロシアの振付師に関するE. サウリツの2論文がある。①Elizabeth Souritz, 1985-86/17/2&18/1, Feder Lopukhov: A Soviet Choreographer in the 1920's, pp.3-20.②Elizabeth Souritz, 1989/20/2, Soviet Choreographers in the 1920's: Kasian Yaroslavich Goleizovsky, pp.9-22.

130 舞台美術については, ディアギレフ・バレエ・リュッスの初期に美術を担当し革命的業績をあげたニコライ・レーリヒとその舞台美術に関するK. アーチャーの論文が注目される。Kenneth Archer, 1986-87/18/2, Nicholas Roerich And His Theatrical Designs: A Research Survey, pp.3-6.この論文は, 上述したM. ホドゥソンによる「春の祭典」の再現上演(1987年)にも関与する貴重な資料を提供したとされている。しかしアーチャーは, パリ, ロシア, イギリス, アメリカ, インドなど3大陸をまたにかけ, 美術のみならず歴史, 考古学, 哲学から赤十字などの社会活動に至るまでの多面的分野で活躍したレーリヒの研究は地理的, 語学的壁もあって, 断片的資料が明らかになったに過ぎず, 全貌が明らかになるのはこれからであるとしている。

## 200 舞踊史

まず第1に, バレエ・モダニズムを探るL. ギャラホラの論文。Lynn Garafola, 1989/20/2, The Making of Ballet Modernism, pp.23-32.これまで, 多くの歴史家によってバレエ・モダニズムの発祥地点は, ジャン・コクトーの台本, エリック・サティの音楽, ピカソの装置, レオニード・マシンの振付による「パレード」(1917)とされ

ているが, 近代主義への転機は, ディアギレフと大戦中のイタリア・アヴァンギャルドとの出会いにあり, 「パレード」は発端ではなくモダニズムの集大成であるという仮説に立って, 特に1914-17年を重要な時期としながら, バレエ・リュッスの活動を, 未来主義, ネオプリミティビズム, ピリオド・モダニズムとの関連で解き明かして新たなバレエ・モダニズムの考察を展開している。

その他, 19世紀ロシアのバレエに関して2つの論文がある。①Lynn Garafola, 1985-86/17/2&18/1, The Travesty Dancer in Nineteenth-Century Ballet, pp.35-4.②Paul Schmidt, 1989/20/2, Pushkin and Istomina: Ballet in Nineteenth-Century Russia, pp.3-7.

これらの論文と120 舞踊家研究の論文をあわせて考えると, バレエ・リュッスのようにすでに先行研究の多い対象から未だ手付かずのものまでを含めて, ロシア関連のバレエに対する関心が高まっているといえよう。

バレエ技術史としては, オウガスタ・ベストリスと技術の発展に関する論文, John V. Chapman, 1987/19/1, Auguste Vestris and the Expansion of Technique, pp.11-18., ポアント技法の初期の発展に関する論文, Sandra Noll Hammond, 1987-88/19/2, Searching for the Sylph: Documentation of Early Developments in Pointe Technique, pp.27-31.がある。

次にモダンダンスでは, ベニントン・スクール開校(1933)以前のモダンダンスについて書かれたM. シーゲルの論文, Marcia B. Siegel, 1987/19/1, Modern Dance Before Bennington: Spring It All Out, pp.3-9.がある。アメリカモダンダンス初期の様相はベニントン以前と以後では大きく異なり, そこにひとつの区分線を引くことが出来る。ベニントン以前はダンカン, デニションであり, ベニントン以後はビッグフォーと言われるグラハム, ハンフリー, ワイドマン, ホルムらがニューヨークに結集して, 個別に, 時には組織的に芸術活動を展開し, アメリカが生み出したモダンダンスが確立していく時代である。この論文は, そのベニントン以前, 特に, 新しい芸術の創造に燃える多くの若手がニューヨークに集まり, 活発な活動を開始したベニントン開校直前に焦点をあてている。1928-29年のニューヨークシーズン(10-5月)には小さい公演やイベントを除いても129公演が開催されたという。これらの舞踊活動を新聞記事などから拾いあげて, その当時の多くの舞踊家を追いながら, ダンカンやデニションの影響から離れてアメリカ・モダンダンスが成立していく様相の一端を明らかにしている。

バレエ教授法に関する3論文があげられる。まず、テクニク・クラスと振付クラスにおける教師の行動を分析したM. ロードの論文、次に、バレエにおける生徒の演技を考察したG. カッシングの論文、そしてソデバスクの新しい指導方法を考案したH. C.ワイリーの論文である。①Madeleine Lord, 1981-82/14/1&2, A Characterization of Dance Teacher Behaviors in Technique and Choregraphy Classes, pp.15-24.②Gayle Kassing and Lynn Mortensen,1981-82/14/1&2, Critiquing Student Perfomance in Ballet, pp.43-46.③Hannah C. Wiley, 1987-88/19/2, A New Model for Teaching Saut de Basque, pp.9-13.

### 700 心理学

バランス系技術演技中のモダンダンサーの集中力について研究したN. ジェットの論文, Nadine Jette, Jacqueline Shick, and June Stoner, 1985/17/1, Concentration of Modern Dancers While Performing Balancing Tasks, pp.21-25, バレエダンサーの舞台とリハーサルでの心理生理的緊張を分析したP. ヘルンの論文, Pertti Helin, 1989/21/1, Mental and Psychophysiological Tension at Professional Ballet Dancer's Performances and Rehearsals, pp.7-14. この心理学領域については、CORDのDRA第11巻(1978)で特集が組まれている。

### 800 バイオメカニクス

モダンダンサーの生理学的プロフィールを明らかにした論文, Steven J. Chatfield, William C. Bynes, David A. Lally, and Sharon E. Rowe, 1990/22/1, Cross-sectional Physiologie Profiling of Modern Dancers, pp.13-20., グランバットマン・ドゥバンの技術分析をした論文, Rhonda S. Ryman and Donald A. Ranney, 1978-79/11/1&2, A Preliminary Investigation of Two Variations of the Grand Battement Devant, pp.2-11. 技術の進歩と競争の激化により細い身体が要求されるバレリーナの栄養状態を調査した論文, Jane M. Bonbright, 1989/21/2, The Nutritional Status of Female Ballet Dancers 15-18 Years of Age, pp.9-14.などがあげられる。

以上、モダンダンスとバレエを対象にした論文を概観してきたが、舞踊家と舞踊作品研究及び舞踊史研究が充実しているといえよう。しかし、技法を中核に据えた舞踊上演学研究やポストモダニズム以降の現代の舞踊作品(モダンダンス, バレエを含め)にきりこんだ論文がなかったことは淋しい。1回性の舞台や生きている作家を研究する難しさはあるものの、評論だけに止まらず、踊り手の演技そのものや、現在活躍中の振付師、作品

を対象にした研究が行なわれることによって、舞踊家に関する資料や瞬時に消える舞踊作品の資料を収集・整理して残していくという役割を、舞踊研究も担って行くべきではないかと考える。また、理論体系と科学的客観性の総合という視点からみると、DRJでは、理論研究とテクノロジーを駆使した実験研究は平行線のみで、総合的成果を挙げた研究は残念ながら未だ見当らなかった。紙数及び時間の制約から現状概要に終止したが、ご照会があれば可能な範囲で情報提供をしたい。

### おわりに

1974年に初版が出版されて以来、毎年補遺版が出版されてきた「ニューヨーク・パブリック・ライブラリー・ダンスコレクション(NYPL'S Dance Collection)」が、1990年補遺版を含む全編がディスク化されて「Dance on Disc」(ONCD-ROM, G. K. Hall & Co.)として発売された。充実したコレクション内容は、図書館側の努力もさることながら、多くの研究者や舞踊家が寄贈するという事情に支えられてもいる。特に、舞踊家が寄贈した一次資料は貴重であり、コレクションを利用してまとめられた研究も多く(というより利用しない研究はないと言った方が当たっている)、舞踊学の発展に果たした役割は多大である。

今後、日本においてもダンス・ライブラリーの体制が早急に整うことが望まれるが、さらに1993年8月東京で開催される「アジア国際舞踊会議とフェスティバル(JADE '93)」(註⑧)のような国際会議や国際的共同研究などの一層の推進によって、日本の情報を世界に向けて発信しながら、研究成果を体系的に累積していくことも必要であろう。

### <註>

- ①松本千代栄「舞踊学の動向—学校教育の側面から」、1978, 創刊号, pp.7-10.
- ②板谷徹「日本における舞踊研究の足跡—日本舞踊史を中心に—」、1978, 創刊号, pp.10-13.
- ③石福恒雄「展望 語られた舞踊論」、1979, 第2号, pp.23-28.
- ④上林澄雄「理論体系と科学的客観性との総合—コード重要文献の紹介と解説—」、1979, 第2号, pp.29-31.
- ⑤遠藤保子「アフリカにおける舞踊人類学の研究動向」、1989, 第12号, pp.44-46.
- ⑥宮尾慈良「アジア舞踊の研究動向(東南アジア編)」, 1991, 第14号, pp.20-21.
- ⑦片岡康子他「1980年代 JOHPERD (Journal of Physical Education, Recreation and Dance) 誌にみるアメリカ合衆国舞踊教育の現状」、1990, 東京体育学研究, pp.13-17.
- ⑧JADE '93事務局, 国際舞台芸術交流センター, ⑩106 東京都港区六本木7-3-12-5B, ☎03-3423-7018